

場所と思い出

江崎愛理沙

場所と思い出が一致する

それはもはや

思い出が場所を犠牲にしている
とすら言えてしまう

駅に降り立つ

駅を通り過ぎる

駅員の声を媒介に駅の名前を聞く

どの瞬間でも

思い出が心を侵食する

もう、きつと、この先もずっと

場所が思い出を想起して

時を止めてしまう

私のことだって、止めてしまう

この銀色の改札には

いつだって

別れ際の手を

名残惜しそうに見つめる私がいる

この瞬間の中ではもはや

時間も季節も嘘を付いている